



今日の裏方 TODAY'S STAFF

1. 熊野 亜紀
Aki Kumano



2. こども料理教室
やっています

3. アレイホールで食事やお茶やおやつを用意しています。観劇の合間にお腹をあたためて来てください。

1. 阿部 楓
Fu Abe



2. フェスティバルバー
& ジャーナルデザイン

3. 今日の占い：ジャーナルを読みながらパーのごはんを食べると大吉◎

1. 小城 正樹
Masaki Kojo



2. 東京都の水道橋（神保町）という街で飲食店を営んでいます。

3. 二年前の様子を遠くから眺めておりました。なんと夢のような！今回は手伝わせてください

1. 名前
2. 私のお仕事
3. 観客へのメッセージ

1. 菅野 信介
Shinsuke Kanno



2. フェスティバル BAR
責任者

3. フェスティバル BAR では毎日美味しいごはんやスイーツ、ドリンクを用意します！

1. 赤間 萌美
Moemi Akama



2. フェスティバル BAR
のスタッフ

3. 人形劇の合間に美味しいごはん和ティータイムも楽しめます！

1. 内田 翼
Tsubasa Uchida



2. フェスティバル BAR
のサポート

3. またとんでもない演目に出会えるのが楽しみです！パーにもぜひ！

10:00-11:00
朝ごはんトーク②
@ 下北沢アレイホール
『EXIT』を上演したダムーザ+フェケテ・セレクトレクメンバーをお招きし、創作の背景や上演に込めた思いをお聞きます。

11:00-11:45
ガザの人形劇を支援する映像上映会
@ 下北沢アレイホール
国際人形劇連盟が立ち上げた募金キャンペーンです。以下の三作品を上演します。
砂絵アニメーション「We truly deserve life!」(2025年)
ドキュメンタリー「Everything That Is」(2025年)
人形劇映画「The Awakening」From Ground Zero プロジェクト(2024年)

16:00-17:00
@ スズナリ
メインプログラム『KAZU』(カンパニー・サンジュ・ディーゼル)

17:30-19:00
第4回 インターナショナル・パペットスラム 第一夜
@ 下北沢 Club251
各組の持ち時間は10分以内で、公募により選ばれた国内アーティスト数組に加え、タイ、台湾、日本からのゲストも出演します。ドリンクを片手に楽しんでください。

12:00-14:00
トーク&レクチャー②
「アジア人形劇ラウンドテーブル」
@ 下北沢アレイホール
日本・台湾・タイの人形劇の「いま」を語り合うラウンドテーブルです。
登壇者：石井秀明(「パペットパーク」http://www.puppetpark.com/ 主宰)、Ta Lent Show/ ター・レント・ショウ(タイ)、飛人集社劇團/ フライニング・グループ・シアター(台湾)、JJJO/ ジージョ(日本)、クラウディア・オレンスティン(アジア人形劇研究者/ ニューヨーク市立大学)、山口遥子(人形劇研究者/SIPF)

20:00-21:00
@ スズナリ
メインプログラム『KAZU』(カンパニー・サンジュ・ディーゼル)

第2回 下北沢国際人形劇祭 2026 DAILY JOURNAL

DAY2
Wednesday 18,
February,
2026



昨日から第二回下北沢国際人形劇祭(SIPF)が始まりました。初日は、前回同様、夜公演に先立ち、フェケテ・セレクトレクによる生演奏を交えたオープニング・セレモニーが開催され、会場のスズナリはフェスティバルの華やかな熱気に包まれました。そして、第二回 SIPF の幕開けを飾ったのは、カンパニー・チャイカによる『かもめ』です。主人公は、人生最後の舞台を控える女優チャイカ。彼女が最後に挑む役は、演劇ファンなら誰もが知る名作、チャーホフの『かもめ』に登場する女優であり母でもあるアルカージナ。チリ出身の人形劇俳優ティタ・イアコベリが巧みに操るチャイカは、自身の境遇と役柄とが交錯するなかで、次第に舞台上で自分を見失っていきがち…。彼女の行方と作品のさらなる考察は、デイリージャーナル部員による劇評とイラストでお楽しみください。

一体あのドレスのなかに何人居たのだろうか。

表現に用いるセットはミニマルで、その表現は抽象的だが、表現された人物や物語、その作者の存在までもが俳優の身体に蓄積していき、内側にスペクタクルが広がっている。

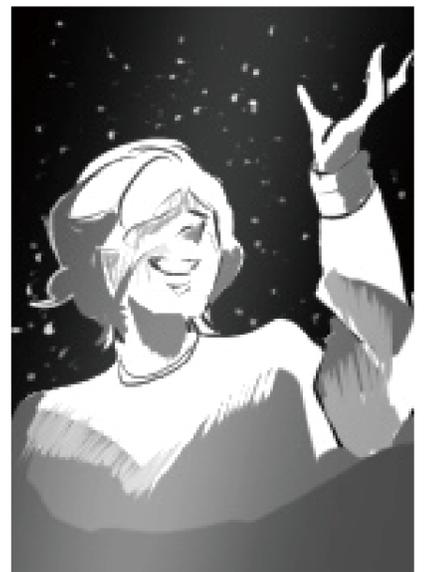
チャーホフの『かもめ』を読んで一番グラフィカルな印象が残っているコンスタン

チンの上演の場面。まず、あんなにお金と時間がかかりそうな湖がテーブルとクロスで事足りてしまっていることに驚いたが、私が気になったのはニーナを操る手だ。演出家は人形の腕から自身の手を抜き差しして、その使い分けをしていたので誤読かもしれないが、あの時チャイカがニーナを操っているように見えた。つまり、操演師につかわれている人形が、また別の物体を操っているようにみえた。そのことで俳優であると同時に観客でもあるという、演者と観客の境界、プロセニウムアークが役者の身体に重なっていくような世界がみえた。演出家は俯瞰の視点を持っている存在だと思うが、俯瞰と、第三者の視点から見るとは異なる。しかし、オブジェクトシアターではどう頑張っても人形それ自体にはなれないので、俳優が演じる主体と完全な観客を両立することが可能になる。演出家の腕がニーナを動かしているようにみえたとしたら、この重なりには気づかなかった。それはチャイカが主体であるようにみえていたからだろう。

演劇をみていて一番アツいのは、劇が前提としている役や枠組みが崩れるポイントである。最終幕で、チャイカはコンスタンチンをポケットにいれて最後まで演じきるわけだが、その時の声がチャイカ・コン

スタンチン・演出家が同時にいるような、多声的なものに聞こえた。その瞬間には俳優が演出家として舞台にたち、人形の女優を演じながら、その人形がまたオブジェクトの登場人物を演じるという前提が崩れて、チャーホフの頭の中に『かもめ』があった時から今日に至るまでの全てがああひとつの身体に重なっていた。

こまいみみ(デイリージャーナル編集部)



絵:てんの(デイリージャーナル編集部)

メインプログラム MAIN PROGRAM

かもめ Compagnie Tchaïka

観客は、まるで追いかけるようにこの作品を見るだろう。下敷きとなったチェーホフの「かもめ」それ自体が、演劇のなかで演劇を行うというメタ的な要素を持つが、カンパニー・チャイカの「かもめ」では操演する人間と人形、人間とモノというさらに別のレイヤーが加わる。基本的に、人形劇は操演者と人形を別の人格として捉えることで成り立っているが、本作品では人形と操演者が常に同時に存在し、重なったり離れたりすることで常に二人の立場が反転し続ける。人形は生き活きと動き回るかと思えば、突然自分をメタ的に解説して笑いを誘う。人間の操演者のほうも、いわゆる人形使いとして無機物のように息を潜めている瞬間もあれば、人間として主役を奪ったりもする。そもそも、永遠に若くいられるはずの人形が、若い頃を懐かしむ老婆として登場し、チャイカ自身でもある操演者が、チャイカの演劇の才能を尊敬する若い女性として登場している構図も、すでに逆転している。演劇における暗黙のルールに慣れている観客こそ、この劇をどの前提にたって見てよいのか分からなくなり、舞台上の二人に振り回され、迷子になる。原作の「かもめ」でコンスタンチンが目指した新しい芸術とは、このような形式であ



絵：てんの（デイリージャーナル編集部）



ったかもしれない。

本作で最も衝撃的だったのは、チャイカのかつらがすっぽりと抜けるシーンである。かつらが抜けたチャイカはただの人形、ですらなく無機質なマスクとなってしまふ。その後、二人がさりげなく袖の方を向く瞬間がある。このような、観客に対して人形が真横に向くポーズは、人形を掴む操演者の手が丸見えになってしまうため通常は避けられるが、本作ではそれをあえてやってのけるのだ。かつらの取れたチャイカが横を向き、一瞬だけ顔の裏側の空洞が見える。チャイカが単なるモノでしかないことを露呈するこのシーンは、グロテスクで

difference between the living body that manipulates and the object that is manipulated. The performance begins with Tchaïka acting the famous decadent-style play-within-a-play in Chekhov's The Seagull, about a soul in a world where all living beings have breathed their last. On this stage, echoing that world, a teddy bear plays Konstantin, a red book and a chair play Trigorin, and a piece of pink organza fabric plays Nina. Throughout the performance, Iacobelli urges a reluctant Tchaïka to continue performing Chekhov's The Seagull, but gradually the boundaries between puppet and puppeteer, between manipulator and manipulated, begin to blur. The face of the puppet under makeup quietly becomes the puppeteer's, and when Tchaïka gets dressed up, her face is replaced with Iacobelli's face. Her head separates from her body, and her wig is removed, revealing the puppeteer's arm that animates her. The audience is laughing, but

さえある。それは、見てはいけないものであるはずだ。しかし、二人はそのシーンのあと、むしろ自由にステージ上を動き回るようになる。さまざまな方向を向き、ポーズを取り、二人は身体の共有を観客の目前に晒す。チャイカの左手は、操演者の左手であり、ニーナの左手でもある。チャイカの裏側に血肉を予見したのは観客の勝手であるが、しかし実際、チャイカの肉体に血が通っていた瞬間はあった。境界を行き来する二人の姿は、モノの限界を示すのではなく、モノと人間それぞれの自由を押し広げたのである。

にらせかんな-October（デイリージャーナル編集部）

this is no laughing matter. The fragile illusion collapses, exposing the labor behind the performance, yet the puppeteer persists, encouraging the puppet to perform The Seagull. In the final scene, Iacobelli plays Nina under Tchaïka's direction, and finally they dance together as two inseparable performers. The repeated phrase "Tchaïka, act!" reminds us that puppet theater cannot exist without command, manipulation, or the desire that something inert might come to life. If acting is a form of puppetry, then the actor's autonomy is never a given but something continually surrendered, yet endlessly pursued. The magic of theater lies not only in the character on stage, but in the subtle interplay between seen and unseen, control and surrender, figure and mechanism. The actor, like the puppet, exists only through being animated by another's gaze, command, or desire. Tchaïka's performance reveals acting itself not as an autonomous act, but as a condition structured by dependence, exposure, and animation. Kenyu Paku（デイリージャーナル編集部）

舞台中央からやや上手側の天井からは床上に余るくらいまで白い布が垂れ下がっている。下手側には机とひじ掛け椅子が白い布で覆われている。舞台奥、下手側には字幕用の電光掲示板。白い垂れ幕の前に人形が登場し、赤い照明の中、雪を想起させる粉が天井から降り注ぎ、暗転。幕開けに心が躍る。

人形劇俳優ティタ・イアコベッリと「チャイカ」と名付けられた人形は、下半身で繋がっており、ティタは右手で人形の頭を操作し、左手は人形の手としても動かされる、いわば「半身一体」。「チャイカ」とはロシア語で「かもめ」を意味し、チャイカが演じるアルカージナの背後にはニーナのイメージが重なる。ティタは黒子のように隠れているわけではない。ティタはチャイカの左耳に囁き続けるし、どうしても自分の顔に化粧をすることができなかったチャイカはティタの顔に筆を滑らし、顔を見合わせる。

後半、人形であるチャイカによって舞台上の虚構が暴露され、演じることに疲れたチャイカがティタに演技指導をするという反転が起こる。これは人形劇における「操る人間／操られる人形」という力関係の単純な転換ではなく、演劇における「役を演じている自分／役の中での自分」という俳優身体の緊張関係を示しているように見えた。

ラストの「二人」のチャチャチャは、「人間と人形」という二項対立を超越した関係性を表しているようで、そのステップは空に自由に羽ばたく「かもめ」のように軽やかだった。

池田美月（デイリージャーナル編集部）

人形がオレンジの照明に照らされ、舞台上に現れる。その瞬間、俳優は照明の影となっており、まるで人形が生命をもち、自らの意志で動いているように見えた。足を引きずりながらおろおろと舞台上を歩き回る人形、幻想的な動き、光、音などの演出、劇中劇という設定に、舞台の冒頭からいきなり異世界に誘われる感覚に陥る。

複数の登場人物が、たった1人の俳優により演じられる様は驚異的である。劇中劇では、人形のチャイカがテディベアを使い演じているシーンもあり、舞台全体が俳優と人形が対等な立場で織りなす二人三脚のようだ。さらに、自分でメイクがうまくできない人形が、俳優の存在に気付き、俳優にメイクを行うシーンでは、人形の方が主導権を持ち、舞台を動かしている錯覚に



とらわれた。やがて、今動いているのは人形か、人間か、どちらが主体か。そんな問い自体が無意味にも思えてくる。人形は、劇中劇の中のベテラン女優の役でもあり、老いた女優本人でもある。虚構と現実の境は、人形と人間の境とともに見えなくなる。

ラスト近く、舞台装置を破壊し、老いた女優としての自分の存在を一旦否定したチャイカ。しかし、観客は、最後に足取り軽く踊るチャイカに、後進へ道を譲り、引退を受け入れた決意を投影する。生命のない人形が感情豊かに老いの苦悩を担うという逆説的な構図が、現代社会における役割の継承という課題と、その先にある希望を鮮明に浮かび上がらせた。

小山恵理子（デイリージャーナル編集部）

本屋 B&B 選書



会期 2月17日(火)~23日(月・祝) 営業時間が変更になることもあるそうなのでホームページをチェック！

スズナリから徒歩約15分、小田急の線路沿いを歩いた先の銀色の建物、BONUS TRACKの2階にある本屋B&B。入ってすぐのところにSIPFスペシャル選書コーナーがありました！

人形劇についての本はもちろん、上演作品の原作からレシピ本まで、フェスティバル開催期間中に会おう様々な出来事を深めてくれそうな本たちが並んでいました。フェスティバルのスタッフたちが書いたポップも必見です！

私が気になったのは『世界のアニメーション作家たち』。アニメの作中で歴史の天才たちの会議を開いているミッシェルオスロが北斎について語ったインタビューが載っている！他に、『かもめ』『白い牙』の原作本は上演の振り返りにもおすすめ。絵本もあるよ！

あなたの関心を起点に、人形劇とその周辺に広がる世界をキャッチしてみてください！

